



## いまだからこそ、「うちでできること」VS「学校でできること」

5月5日「こどもの日」の朝日新聞の社説では「うちでできる12のこと」を提案されていました。長く続いている臨時休業(休校)中、本校の生徒さんたちは、各学年・教科等の課題は当然のことながら、日々の自主学習としてノートを工夫しながら取り組んでいることが担任の先生方の学級通信等で見て取れます。とても頼もしいことです。

感染症予防に努めながらも学校が再開されるとなると、学校の授業でこそその「学び」が展開されると期待できます。先生から出される課題を消化するだけでなく、自ら「問い」を見だし、その解決に向け様々な観点から思考をめぐらす。それは個としての「問い」と「答え」です。個から出発する「問い」もペアで意見交換をしたり、学級全体で意見交流をしたりすることで、新たな気づきが得られる。こうした過程にこそ、学級で、学校で学ぶ意義があります。

先の社説の提案の中には次の2つがありました。

感染症がいかに日本や世界の歴史を変えてきたのか、調べてみる。たとえば奈良の大仏ができたのは、天然痘の流行もきっかけの一つだったらしい。

いじめられている子を思い浮かべる。学校が始まってから、その子がいやがらせをされているのを見たらどうやって止めたらいいか、考えておく。

感染症予防の観点からペアでの意見交換は難しいところです。しかし、それは全くできないというわけではなく、書いて交換する、書いたものを拡大表示するなどの工夫方法があります。入学式の式辞でも触れたように「離れてつながろう」を思い返せば、お互いの間隔は適切に取りながらも心では相手のことを思いやる。そうした姿勢であれば、困難な状況にあっても知恵を出し合えるのが「学校でできること」のひとつかもしれません。

いまだからこそその「うちでできること」と「学校でできること」を出し合ってみてはどうでしょうか。

## エッセンシャル・ワーカーの姿を鑑として

エッセンシャル・ワーカーという言葉を目にすることが増えています。生活必須職従事者と訳されることがあり、具体的には電気・ガス・水道、通信・インターネット、鉄道・バス・タクシー、運送業、郵便、コンビニ・スーパー・ドラッグストア、ガソリンスタンド、医療・福祉、ゴミ収集、警察、消防など、私たちの生活を直接支えるライフライン関連産業に携われる方たちのことです。

医療従事者など感染リスクがつきまとう職場で奮闘されている方たちがいます。そうした方たちに対する差別的言動や不当なクレームがあることは、とても憂慮すべきことです。他方で医療従事者を含め社会生活を営む上で重要な役割を果たしている方たちへの支援や感謝の動きがあります。

将来、人工知能(AI)が益々発達して、現在ある職業が代替される事態も起こりうるであろうと言われています。自分に与えられた時間を誰のためにいかに使うか。これは現状を鑑みた場合、エッセンシャル・ワーカーに限らず私たち一人一人に問われているようです。

目指す生徒像として「時間を有効に活用できる生徒」を挙げている本校の生徒さんたちは、私たちを含め身近なところで働いている人たちの姿をどのように見ているのでしょうか。